

# 短期大学における作曲教育の一例

## — シルクロードの音風景をつくる —

山 岸 徹

本稿は、本学音楽学科専攻科の平成13年度「作曲法」授業における指導内容の報告である。

筆者は、この授業を過去十数年にわたり担当しているのだが、平成13年度においては、受講者全員のコラボレーション（共同制作）によって「シルクロードの音風景」をつくることをひとつの目標として課した。受講者全員が分担していくつかの小曲を作曲し、それらを一連のストーリーとしてまとめ上げ、自分たちで演奏（上演）する。言わば、プランニングの段階から制作（作曲）、演奏、発表という音楽創造のプロセスすべてを総合的に体験させようとする試みである。

幸いにも、同年10月に催される音楽学科・定期演奏会で演奏（上演）する機会を与えられることとなり、学生たちは、具体的な目標を持って真剣に取り組む成果を上げることができた。

集団の授業で作曲を教えるということは困難な面も多いのだが、ひとつの可能性としてこのような方法も応用できるのではないだろうか。

微力ながら提案としての意味をも含み、拙稿をまとめることとした。

### 1. 授業の形態と受講学生について

「作曲法」は、音楽学科専攻科で開講されている授業科目である。週1回1コマ（90分間）で、通年にわたる。<sup>1</sup>

平成13年度の音楽学科専攻科在学学生は当初5人であったが、残念ながら途中で1人が抜けることとなり、実質は4人ということになった。その全員が本授業を選択している。4人の学生たちは、全員がピアノの演奏を「主たる専攻」としていて、作曲を専攻する学生はいない。ただし、短期大学音楽学科1～2年在学中に「音楽理論」、「キーボードハーモニー」、「アナリーゼ」などの音楽理論関係の科目を履修しており、音楽理論に関する基本的な知識と技量をすでに習得していると考えられる。また、ピアノの演奏については、当然ながら相応の技量を身につけている。

### 2. 授業の目標と進め方について

従来この授業では、楽曲分析などを含んだ全員に対する一般的な説明と受講者一人ひとりに対する作曲能力の向上を主眼として指導を進めてきた。平成13年度においても、当初はその方式を踏襲して指導を進める予定であった。

1. 音楽学科専攻科における「作曲法」は、2期2単位にわたる「演習」の科目である。

ところが、秋に催される音楽学科・定期演奏会において、初めての試みとして本授業の成果を発表する場を与えられることとなり、それを受け4月半ばに急きょ授業の方針を一部分変更することとなった次第である。発表とは、具体的には定期演奏会の「第3ステージ」で受講学生の作品を演奏するということで、持ち時間は約20分間である。

多くの方々に聴いていただくことを前提とするわけで、説得力のある魅力的な音楽表現でなければならない。そのために、一人ひとりが別々に無関係な作品発表を行うのではなく、ステージ全体をひとつのオリジナル作品として受講学生全員でコラボレーション（共同制作）によってまとめ上げてみてはどうか、という構想を筆者より学生たちに提案したわけである。そして、具体的なプランについて受講学生全員で長時間にわたりディスカッションを重ねた。学生たちは大変意欲的で、積極的にさまざまなアイデアが提案され、共同制作により作品づくりが始まった。

### 3. 作品のプランニングについて

この作品のプランニングにおいて筆者がとくに強調したことは、“イメージ作り”ということであった。単なる音のみの要素によるのではなく、絵画や詩、物語、あるいは地誌や民俗学などといったさまざまな題材や知識に基づいて音のイメージを作り上げてみるということである。そして、「シルクロード」をキーワードとして作品をまとめてゆくことを示唆した。

この作品のプランニングにおけるプロセスを以下に示す。

#### ① 筆者（指導者）より前提条件の説明

→ 定期演奏会（10月27日）の「第3ステージ」でコラボレーション（共同制作）によるオリジナル作品を演奏するという前提条件を示した。

#### ② 作品のテーマ、キーワードなどの選定

→ 筆者より、話題性があり本学や奈良にちなんだテーマを選ぶことを提案した。

→ 筆者より、先般石室内に壁画が発見されたキトラ古墳の新聞記事などを提示した。

→ いろいろイメージが膨らんだが、結局のところ作品のテーマとしては次の2案に集約された。

I案：ヨーロッパの国々を音楽で巡る旅

II案：キトラ古墳の石室内に描かれた朱雀が空を飛びシルクロードの国々を巡る旅

→ 作品全体のテーマを上の方のII案にもとづいて決定した。

タイトル：「東西の風 ―シルクロードの音色を求めて―」

#### ③ 標題音楽についての説明

→ ドビュッシーや武満徹の作品を例として、音楽による自然描写などについて説明した。

#### ④ 作品全体の構成、イメージの具体化

→ 資料を収集し、CD、レコード、ビデオ等については全員でそれらを鑑賞した。

→ このステージ全体を「日本」、「韓国」、「中国」、「モンゴル」、「インド」、「アラブ」、「エンディング」という7つの場面で構成し、それぞれの場面ごとに分担して作曲することとした。

→ 各場面にナレーションを挿入し、物語風に流れを作ってゆくこととした。

→ 民族音楽、美術、写真、地誌などさまざまな題材や知識をヒントに、雰囲気、温度感、色調といった各場面の具体的なイメージを作り上げていった。

ディスカッションにおける各場面の具体的なイメージ作りのプロセスは、おおむね次の表1. のようになった。

表1. コラボレーション（共同制作）にあたってのイメージ作りのプロセス

		イメージ作りのプロセス（背景の雰囲気、温度感、色調など）
場 面	1. 日 本	シルクロードの終着点・奈良 → キトラ古墳の石室内に描かれた朱雀 → 朱色の鳥の羽ばたき → 茜色の空 → 夕焼け色
	2. 韓 国	オレンジ色
	3. 中 国	山岳地帯の雲海 → 水色
	4. モンゴル	草原（なだらかな高原）→ さわやかで心地よい初夏のイメージ → 明るい緑色と青空
	5. インド	ガンジス川の沐浴 → 深い川の色 → 黄土色
	6. アラブ	モスクに描かれたモザイクの壁画（ブルーモスク）→ 青い宝石（トルコ石） → クリーム色の砂漠の補色としての空の青 → 紺色（ペルシャブルー）
	7. エンディング	全体の締めくくり → クライマックス → シルクロードの人々の喧噪・賑わい → 祭り → 虹色

#### 4. 作品制作および演奏・上演について

上述のような準備段階を経て、学生たちは作品制作にとりかかった。7つの場面にそれぞれ1曲ずつ配置し、表2. のように分担して作曲することとした。

各場面の音楽がそれぞれの地域の特徴をできるだけ明確に表し、聴き手に視覚的なイメージをもたら

表2. 各場面の分担と楽器編成

		作曲担当者 （学生）	曲 名	楽器編成および演奏担当者（学生）			
				ピアノ	シンセサイザー	打楽器	ナレーション
場 面	1. 日 本	A	火の鳥	B	A		C
	2. 韓 国	（編曲：D）	アリラン	B	C		A
	3. 中 国	C	泰山	A	C		B
	4. モンゴル	B	（モンゴル）		B		A
	5. インド	B	（インド）		B	A	C
	6. アラブ		（トルコ）				C
	7. エンディング	A	祭り	E（2年生）	A, B	C、および 2年生5人	C

\*第6場面の「アラブ」については、作曲担当者が決まらず、トルコの民族音楽の録音を再生することになった。

すような、言わば「音風景」として仕上げられることを期待したわけである。

場面ごとの曲名や楽器編成もそれぞれの特徴を生かせるよう考えさせた。学生たちは、各地域の民族音楽について調べ、固有の音階を積極的に取り入れて作曲したり、シンセサイザーによって民俗楽器の音色の再現を試みたりと、各自で工夫を凝らした。

作曲指導にあたっては、おもに個人レッスンの形態をとったが、各曲のつながり具合などをその都度確認し合うためにも他の学生のレッスンを見学させた。また、演奏も自分たちで分担して行うわけで、作曲の途中において部分的に演奏を試みて聴き合う機会を作り、意見交換をすることによって各自の作曲に相乗的効果をねらった。

作曲が進んだ段階で台本の作成にとりかかった。(資料2.) 各楽器やマイクの配置、場面ごとの照明

資料1. 作曲のイメージ作りのために学生が描いたイラスト



の色使いやナレーションを含んだ舞台進行などのプランを細部にわたって検討した。また、台本に添った形での上演のリハーサルも学内・演奏ホールにおいて繰り返し行った。

定期演奏会当日の上演にあたっては、ホールのスタッフの方々の暖かいご協力と示唆により、いっそう効果的な演出を実現することができた。なお、終曲はクライマックスを築く意味で打楽器を多用した編成となったが、演奏にあたっては本授業を履修していない学生（2年生）が加わった。

## 5. 年間の授業の流れについて

本授業の1年間の流れ全体を振り返ってまとめてみると、おおよそ次の表3.のようになる。

表3 平成13年度・音楽学科専攻科「作曲法」授業の年間のプロセス

		授 業 内 容
時 期	4月～5月	・「作曲法」全般的な説明 ・簡単なピアノ曲の作曲（個人指導を含む）
	5月～6月	・共同制作による作品の発表（上演）を目標とすることを筆者より学生に提案 ・作品のテーマ、構成、作曲方法、演奏方法などについてのディスカッション ・資料収集 ・実際のプランニング、分担ぎめ ・作曲
	7月、9月	・作曲および作品全体の流れの確認 ・台本の作成（ナレーション等） ・舞台図面の作成（舞台図面・照明等）
	9月～10月	・作曲の仕上げ ・曲の練習 ・舞台練習（本学演奏ホールでの、台本に添った形での全体リハーサル）
	10月27日	・「定期演奏会」での発表(上演) 於：大和高田市文化会館「さざんかホール」
	11月～12月	・演奏の反省 ・作品楽譜等の整理、まとめ
	1月	・新たな作品の個人制作（作曲） ・楽曲分析等

## 6. 指導の観点と評価について

前年度まで、本授業における作曲指導では、「二部形式」、「三部形式」、「ロンド形式」などに基づいたピアノ曲の作曲を主な目標としていた。音以外の要素を結び付けて作曲指導したのは初めてである。

指導するにあたって筆者は、最初のプランニングの段階においては、学生たちに対して前述のように積極的な提案を繰り返し行った。それは、彼女らにとってこのプランが言わば未知なるものであり、当初はなかなか具体的な完成像が見えてこなかったと思われたためである。

ところが、作品完成の意図を説明し、イメージ作りの段階に入ると学生たちも次第に調子が出てきたようであった。学生たちは、意外なほどアジア諸国に対する関心が高い。テレビ、ラジオ、CDなどといったさまざまなメディアからそれらの文化に関する知識・情報を得ているようであった。アジア諸国の音楽（民族音楽）に対する興味も強い。近年、とくに若い世代の間で「アジアブーム」と呼ばれるアジア諸国の文化への志向が高まっているということも背景として考えられる。「シルクロード」は、学生たちが音楽作りをするにあたって、意外に親しみやすいテーマだったようである。作曲をする際に、イメージ作りからアプローチしたのは大変効果的であったようだ。

個々の作曲の段階における指導にあたっては、学生の主体性をできるだけ重視することを心がけた。各自がイメージを広げ、のびのびと独創的な音作りができるよう自由なスタイルにまかせた。学生相互の刺激も功を奏したようである。

一方、困難を感じた場面もあった。コラボレーション（共同制作）を行うにあたっては、当然ながら受講学生のチームワークが大切である。作曲という一般的に考えてきわめて個人的な作業を集団で行おうとするわけであるから、考え方や感じ方の違いがトラブルの原因となりかねない場面もあった。

しかし最終的には、受講学生の努力が実を結んだと言える。学内の諸先生方のご理解を得られたこともこの計画の実現につながった。また、些細なことではあるが、複数の新聞紙上でこの作品の上演について取り上げられ、評価されたことを学生ともども感謝している次第である。

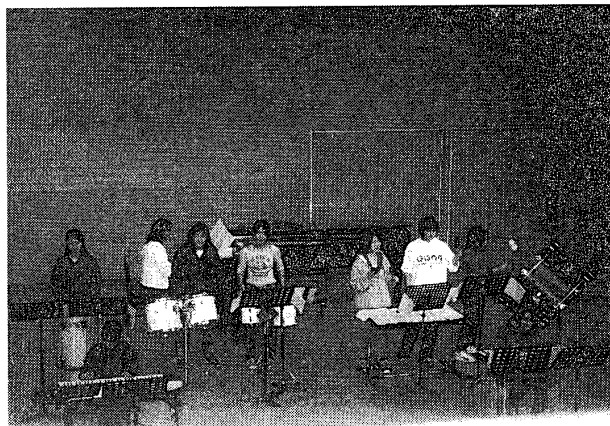


写真 1. 定期演奏会直前のリハーサル風景  
(2001年10月・本学演奏ホール)



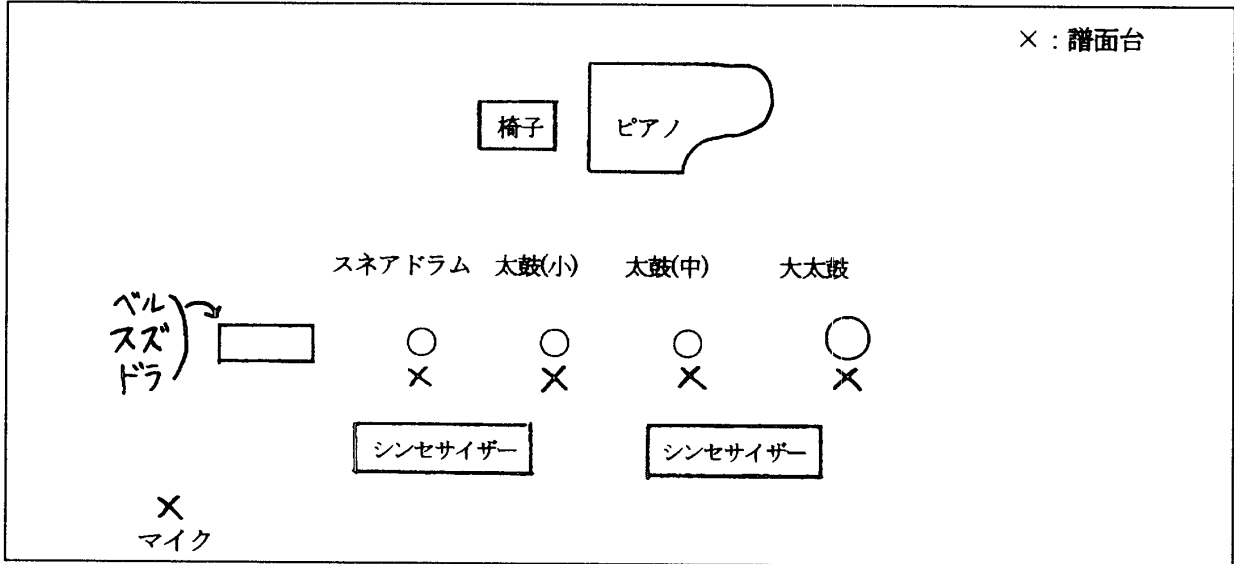
写真 2. 定期演奏会後の授業風景／反省会  
(2001年11月・音楽棟433研究室)

資料2. 奈良文化女子短期大学音楽学科・第28回定期演奏会：舞台図面・進行表

(第3ステージ：「東西の風—シルクロードの音色を求めて—」)

2001年10月27日(土)、さざんかホール(大和高田市文化会館)

舞台図面



進行表(抜粋)

時間	舞 台	照 明
15:00	<p>(緞帳：閉)</p> <p>本ベル</p> <p>カゲアナ⑦</p> <p>「第3ステージでは、専攻科学生の共同制作による作品：「東西の風—シルクロードの音色を求めて—」をお聴きいただきます。演奏は、○○、○○、○○、7曲目のみの出演は、2年生の○○、○○、○○、○○、○○、○○、です。」</p> <p>反響板：<u>なし</u>、演奏者：板つき</p> <p>「東西の風 —シルクロードの音色を求めて—」</p> <p>CUE1 ・緞帳：上げ</p> <p>CUE2 ・第1曲：「火の鳥」</p>	<p>ホリゾン ト 朱色</p>

時間	舞 台	照 明
	<p>・第1曲目の途中でナレーション</p> <p><b>MC：3 ステージ①</b></p> <p>「シルクロードは、遠くはローマからギリシャ、アラビア半島、インド、中国などを通り日本につながる道です。シルクロードによって数多くの貴重な品々や文化が伝えられました。この“東西の風”は、シルクロードが通ったゆかりの地をそれぞれイメージし、ひとつの作品として作り上げたものです。</p> <p>第1曲目：“火の鳥”は、日本の地を、とくにシルクロードの終着点と言われている正倉院がある奈良をイメージして作曲したものです。ここ奈良には、正倉院だけではなく、さまざまな文化遺産があります。この春に発見されたキトラ古墳の石室に描かれていた朱雀の絵もこの曲のイメージの題材のひとつです。今日は、このシルクロードの終点・奈良を出発点として、今からシルクロードを逆走する形で演奏したいと思います。“シルクロードの音色の旅”をお楽しみください。」</p> <p><b>CUE3</b> ・次の曲の準備（演奏者移動、その間ナレーションを入れる）</p> <p><b>MC：3 ステージ②</b></p> <p>「韓国の歌をまったく知らない人でも“アリラン”ならば知っている。それほど有名で代表的な韓国民謡です。歌詞に出てくるアリラン峠は、実在の地名ではありません。この曲の由来には、さまざまな説が唱えられ、また歌詞もいろいろな種類があります。」</p> <p><b>CUE4</b> ・第2曲：「アリラン」</p> <p><b>CUE5</b> ・次の曲の準備（演奏者移動、その間ナレーションを入れる）</p> <p><b>MC：3 ステージ③</b></p> <p>「次は、中国の“泰山”という山を思い浮かべて作った曲です。“泰山”は、山東省の黄河沿いにある険しい山で、この地方の二大聖地の一つであり、中国を代表する名山でもあります。海拔1,545メートルのこの山は、観光地にもなっているのですが、山頂までは、6,700段あまりの石段が続いていて、登るのに半日はかかると言われています。頂上に立てば、眼下に雲海が波のように広がり、所々から峰々が頭だけを覗かせています。そして、その場に立つと願いごとがかなうと言われています。」</p> <p><b>CUE6</b> ・第3曲：「泰山」</p>	<p></p> <p>薄暗く</p> <p>MCにピンスポ</p> <p>黄色</p> <p>薄暗く</p> <p>MCにピンスポ</p> <p>水色（雲）</p>



時間	舞 台	照 明
	<p data-bbox="328 286 868 331">CUE7 ・ 次の曲の準備（演奏者移動）</p> <p data-bbox="328 376 916 456">CUE8 ・ 第4曲：「モンゴル」 ・ 第4曲目の途中でナレーション</p> <p data-bbox="316 495 584 533">MC：3 ステージ④</p> <p data-bbox="316 557 1219 719">「緑の大草原、無限に広がる澄んだ青空の彼方に連なる山々、その上部には万年雪が光り輝いています。緑、紺、青、白が混ざる天然の配色…想像しただけでもわくわくするような ……（以下省略）」</p> <p data-bbox="328 770 868 815">CUE9 ・ 次の曲の準備（演奏者移動）</p> <p data-bbox="328 860 916 940">CUE10 ・ 第5曲：「インド」 ・ 第5曲目の途中でナレーション</p> <p data-bbox="316 978 584 1016">MC：3 ステージ⑤</p> <p data-bbox="316 1041 1219 1158">「ガンジス川はヒマラヤ山脈を源流とし、インド北部の平原を斜めに貫いています。ガンジス川は単なる川ではなく、インドの人々の精神のシンボルであり、インド文化の象徴でもあります。……（以下省略）」</p> <p data-bbox="328 1209 868 1254">CUE11 ・ 次の曲の準備（演奏者移動）</p> <p data-bbox="328 1299 1203 1379">CUE12 ・ 第6曲：「トルコ」（テープで録音を再生するのみ、生演奏なし） ・ 第6曲目の途中でナレーション</p> <p data-bbox="316 1417 584 1456">MC：3 ステージ⑥</p> <p data-bbox="347 1476 568 1514">「……省略）……」</p> <p data-bbox="328 1565 1187 1610">CUE13 ・ 次の曲の準備（演奏者移動、その間ナレーションを入れる）</p> <p data-bbox="316 1671 584 1709">MC：3 ステージ⑦</p> <p data-bbox="347 1733 568 1771">「……省略）……」</p> <p data-bbox="328 1823 932 1868">CUE14 ・ 第7曲：「エンディング／祭り」</p>	<p data-bbox="1251 286 1337 324">薄暗く</p> <p data-bbox="1251 423 1311 461">緑色</p> <p data-bbox="1251 978 1337 1016">薄暗く</p> <p data-bbox="1251 1077 1343 1115">黄土色</p> <p data-bbox="1251 1476 1382 1543">薄暗く （ブルー場）</p> <p data-bbox="1251 1565 1382 1603">MCにピンスポ</p> <p data-bbox="1251 1740 1382 1778">ブルー場</p> <p data-bbox="1251 1805 1382 1872">MCにピンスポ 朱色</p>
15：20	<p data-bbox="328 1912 539 1957">CUE15 ・ 終了</p> <p data-bbox="284 1995 392 2033">緞帳：閉</p>	

資料3. 作品楽譜（各曲の冒頭部分）

\*これらの作品の著作権は、すべてそれぞれの作曲者に帰属する。

第1曲：「火の鳥」／日本(ピアノ独奏)

作曲者：学生A

Allegro

Piano

*f*

L.H. >

L.H. >

senza tempo

第2曲：「アリラン」／韓国（ピアノとシンセサイザーによる二重奏）

（前奏部分）

Registration: 073/Picc.

編曲者：学生D

Moderato

Synth.

*mp*

Piano

*mp*

F7

Bb

F

Dm

第3曲：「泰山」／中国（ピアノとシンセサイザーによる二重奏）

♩ = 66    Registration: Rd.070 English Horn    作曲者：学生C

Synth. *mp*

Piano *mp*

5    ♩ = 60    *mf*

第4曲：“Mongolia”／モンゴル(シンセサイザー独奏)

Senza tempo    Registration: Pi 074 Flute    作曲者：学生B

Synth. *p*    *mp*    *mf*

*f*

第5曲：“Indin Music”／インド(シンセサイザー独奏)

Senza tempo    Registration: Et 105 Sitar    作曲者：学生B

Synth.

第7曲：「祭り」 / エンディング

Allegro

作曲者：学生A

The musical score is arranged in a multi-stem format. It includes the following parts:

- Synth. I**: A single melodic line in the treble clef, starting in the fourth measure with a *mf* dynamic.
- カネ** (Kaneshi): A rhythmic line in the treble clef with a *mf* dynamic, consisting of eighth-note patterns.
- スズ** (Suse): A rhythmic line in the treble clef with a *mf* dynamic, consisting of eighth-note patterns.
- 太鼓 (高)** (Taiko High): A rhythmic line in the treble clef with a *mf* dynamic, consisting of eighth-note patterns.
- 太鼓 (低)** (Taiko Low): A rhythmic line in the treble clef with a *mf* dynamic, consisting of eighth-note patterns.
- 大太鼓** (Otaiko): A rhythmic line in the treble clef with a *mf* dynamic, consisting of eighth-note patterns.
- Synth. II**: A melodic line in the treble clef with a *mf* dynamic, featuring sixteenth-note patterns.
- Piano**: A melodic line in the treble clef with a *mf* dynamic, featuring sixteenth-note patterns and triplets. The bass clef part consists of a steady eighth-note accompaniment.